

# マンズフィールドの愛と喪失

## ——「カナリア」を中心に——

水田圭子

マンズフィールド (Katherine Mansfield) の最後の作品となった「カナリア」『The Canary』(1922年7月)は全体が10節から成り立ち、第三節を除いて各節は、無言をあらわす三つの点 (dots) で始まる<sup>(1)</sup>。いずれにせよ、ほとんどの節はこのような出だしであり、すべて「私」という主人公の語りで展開する。三つの点は静かな雰囲気の中から話が始まることを示し、一つ一つ思い出をたぐるような感じがでている。短篇の中でもとくに短い作品であるが、この三つの点により、ゆるやかな時間の流れが暗示され、形と内容が一致して、息せき切ったという感じがなく、ある程度の長さの整いを作品に与える。そして内容というのは愛するものが失われた時の、誰でもが経験する悲しみである。この作品において「愛するもの」とはカナリアである。可愛がっていたカナリアがなくなったことから、その鳥によせた独り身の女主人公のひとかたならぬ思いが少しずつ語られる。この世には病気、貧乏、死というものとは違った悲しみというものがあるという悟りと、愛するものを失った者の心の空漠感を述べる。こうした内容と例の三つの点はぴったりしている。そして三つの点で始まらない節は主人公が意気こんで話す感じがある。次にさらに内容を細かく見ていきたい。

「正面玄関入口の右側にあの大きなクギが見えるでしょう？」と読者は主人公の親しい友人であるかのように直接呼びかけられ、作品の中に入れられてしまう。マンズフィールドの他の作品によくみられる技法の一つである。そしてそのクギは、かつては鳥かごをかけるためのものであったが、鳥が死んでからは、ものをかけるという本来の役割も果たせず、何か孤独に厳しく耐え、空漠感を漂わせている存在に思える。冷たく堅いその存在

がこれから展開するものにしっかり読者の心をつかまえているようで効果的である。また主人公はそのクギを見ることもほとんどできないし、抜くことも耐えられない、むしろ自分の死後もそこにそのままあると考えたいと思う気持は、主人公の鳥に対する真に深い愛情を示している。カナリアへの愛を回顧しながら、主人公は、それが何であれ、人は何かを愛さねばならぬと言う。愛とその喪失がここにおけるテーマなのであるが同時に喪失後の心理状態もよく書いている。ところで彼女は三人の下宿人をおいていたが、彼らは若者でこの女主人公の心に同情を寄せるほどの気もない人たちばかりで、彼女の周りには偶然いい友だちは一人もいなかった。従って彼女の愛したものは、孤独な人が風や雲を友とするように、やや寂しいと思われるものばかりだったが、それらは美しい純なるものばかりであった。

女主人公は、花は、こちらの愛情に報いてくれはするが、同情してくれないという。それでカナリアが来る前には彼女は宵の明星を愛した。宵の明星は金星、すなわち、ヴィーナスであり、ヴィーナスはローマ神話で美と愛の女神といわれる。日没後輝くこの星はきよらかな美と愛の化身である。また星は彼女の毎夕の出迎えの挨拶に答えるかのように、彼女のためだけに輝くように思える。星は彼女の心を察して一段と輝きを増すのである。この星は彼女の憧れであった。しかし彼女はあとで、憧れというよりは後悔に似ていると言う。そして後悔ということについて、彼女は後悔するものは何もないと言う。しかしこの後悔 (regret) は後のカナリアの死への伏線ではないだろうか。またこの宵の明星は黒っぽいゴムの木 (the gum tree) の上に輝くのである。『オックスフォード英語大辞典』によると、オーストラリアでは、「彼は最後のゴムの木を見た」(He has seen his last gum-tree.) といえ「彼はおだぶつだ」(It is all up with him.) という意味だという。金星の象徴する美と愛の下には黒雲が待ちかまえているような感じを起させる。

やがて鳥を売りに来た中国人が<sup>●</sup>か<sup>●</sup>ごに入<sup>●</sup>ったカナリアをかか<sup>●</sup>げて見<sup>●</sup>せた

時、そして小さな鳴き声を出すのを聞いた時、女主人公は、星に対して言ったのと同じ言葉「そこにいるのね、私の最愛のものよ」と思わず言ったのである。彼女は星を迎えたと同じ言葉をカナリアに発した。まるで星はカナリアに姿を変えて彼女を慰めに来たようである。鳥は彼と呼ばれ、水浴びが好きでとてもきれい好きである。汚れがないこと、また鳴き声は“Sweet! Sweet!”と記述され、その鳴き声がいかに美しいか表わされている。また外に鳥かごが下げてあったころ、オーストラリア産月桂樹(mock - orange)のそばの垣根にもたれて人々はうっとりとして聞いていたと、主人公は物語の最初のころで話す。この月桂樹は白い花で香りの濃い花と言われる。そして黄色いカナリアの色や美しい鳴き声、月桂樹からの香りの連想など全体的にどんなによく調和していたか想像が付き、それ故この鳥は彼女にどんなに可愛らしく大切に思えたかがわかる。また彼女がある晩恐ろしい夢を見て、目覚めてからも気が動転して直らなかった。そして台所へ降りて行き、そのことを語る人が誰もいないという思いと、窓をのぞく闇に圧倒され、手で顔をおおった時、ちょっとずれていた布の間からもれた光で目覚めた鳥は女主人公に“Sweet! Sweet!”と鳴いて慰め彼女を暗闇と孤独の恐怖から救ったのである。この“Sweet”には、暖かい心のこもったという意味が入っており、美しさ、愛の心という特徴は星と共通しており、両者とも彼女には大切な友という点で同価のものであったろう。

しかしある日突然、鳥は仰向けになり、目の輝きは失われ、ガギツメはかたく握りしぼられていた。彼女の心痛は言うに及ばず、胸は彼の鳥かごのようにうつろになるのであった。クヨクヨしたり思い出に負けたりはしないが、やはり、人生には何か悲しみがあるように思われると彼女は言う。しかしそれが何であると言いがたいとも言う。われわれ皆が知っている、病気や貧乏や死の悲しみのことではない。それは「深い深い所に、呼吸のように人の中に存在するもの」と言う。この悲しみが「快活な歌声

のもとに」あったのだと言う。このような悲しみは、結局、動物の死によりもたらされたものであり、一匹の生き物の死にたいする深い感動を言うのであろう。ただ泣き悲しむよりももっと広い深い悲哀を表わしているように思われ、それはあるいは日本語における「あはれ」に当たるかとも思われる。つまり単に一匹の動物にたいする悲しみの気持にとどまらず、作者はそれが人生に普遍的にみとめられると言うのである。すなわちカナリアへの深いあわれの心は、大切なものを失ったために生じたもので、女主人公にとり、それは心の傷となり、体の一部となって長く忘れられないものとして残っていることを言っている。また悲しみの内容は人により異なるにせよ、人間の心にひそみ、幸福な時には隠れている悲しみ、そうした呼吸のように気づかれぬ悲しみの存在を、作者は指摘しているようである。

こうしたあわれの感動はウォルター・ペイターの『雑纂』 *Miscellaneous Studies* (1895) のなかの短篇「家のなかの子」 ‘The Child in the House’ で引用されている世界苦 *Weltschmerz* にあたるものであろう<sup>(2)</sup>。マンズフィールドは1908年12月21日の日記<sup>(3)</sup>でペイターのこの作品のスタイルで人生を書きたいと言っている。彼女の最後の作品にペイターを思わせる部分があったことは興味深い。

伝記的にこの作品を見ると、「蠅」 ‘The Fly’ (1922年2月) に引き続いてその年の7月にこれが書かれたことがわかる。「蠅」では主人公の社長は愛する息子が亡くなって六年以上もたった今、もう前のような悲しみが感じられないことが描かれている。「蠅」の書かれた時点で、マンズフィールドの最愛の弟が死んでから「六年以上」が、実際にたっていることと一致している。それで「蠅」は弟を思って書かれていることは明らかである。「カナリア」も最愛のものの喪失と、その悲しみを描いている点では同一線上にある。短い命で精一杯生きたカナリアの清らかさを描くことにより、夭折の弟の魂を鎮め、さらには作家自身の「白鳥の歌」を創造する結果となったのである。

注)

- 1) Ian A. Gordon, *Undiscovered Country* (London: Longman, 1974), p. 354では冒頭の一節にこの三つの点がない。
- 2) Macmillan 版(1910), p. 182.
- 3) J. Middleton Murry, *Journal of Katherine Mansfield* (London: Constable, 1962), p. 37.